

『久所の始まり』

宮原諄二（小田原市 久所自治会 5組）

はじめに

私たちの住む「久所」という地名はめずらしい。調査で確認されたのは全国で6カ所、すなわち小田原市（ぐぞ）・足柄上郡中井町（ぐぞ）・秦野市（ぐぞ）・相模原市（ぐぞ）・大分県大分市（くじょ）・千葉県館山市（ぐじょう）であった。昔は数多くあったが歴史の流れの中で消えていったのであろう。このうち昔の「相模国」に4カ所もある。なぜ多いのだろうか。中井町の「久所」と相模原市の「久所」の地名の由来は知られているが、それらは私たちの「久所」の由来には当てはまらない。

「久所」は南足柄市の「沼田」、小田原市の「北ノ窪」と「府川」の3つの地域（自治会）に囲まれている。これらの地域はいずれも古代人の住んだ痕跡があり、またその地名は地形に由来し、長い年月を経て定着してきた。しかし私たちの住む「久所」はそうではない。地域の中であって「久所」の地名だけが特異である。「沼田」・「北ノ窪」・「府川」は古くから文献に現れるが、「久所」は現れない。「府川」は「北條家所領役帳」（1559）が初見である。「久所」は「新編相模国風土記稿」（1841）の中の「府川村」の一地域名（小名・小字）として現れる。

現在「久所」は「府川」と「諏訪神社」を共通の鎮守にしているが、軍（いくさ）神である「諏訪神社」の建立と「久所」の出自は関係しているのだろうか。「久所」にはかつて「西光寺」というお寺と「天満宮」というお社のセットがあったが現在は無い。明治政府の「神社合祀」と「廃仏毀釈」の施策はどのような影響を「久所」に与えたのだろうか。

聞き取りおよび史料などの調査から伺えるのは、「久所」は歴史の流れの中で急に現れたように感じられることである。これは誰かがある時期にこの地に入り、その人にとって特別な地名をつけたとする『地名転移説』による説明が最もあり得る話ではないかと思う。

以下に『久所の始まり』と、参考にした『資料：調査のまとめ』を掲げる。『久所の始まり』は仮説の単なる一つであって、間違っている可能性も大きい。内容はすべて筆者の責任である。これを機会に多くの方々が『久所の始まり』について関心を持って下されば、うれしい限りである。

『久所の始まり』

私たちの住む「久所」には、「この地に最初に入り住みだしたのは七人の武者だった」との話が伝わっている。そうであるとすれば、いつ、誰が、なぜ、そうであったのだろうか。

平安末期から鎌倉期にかけて、現在の神奈川県足柄上郡中井町の一带は中村宗平の領有する中村郷と呼ばれていて、日本歴史における武士の誕生の地の一つであった。その中村郷にある五所八幡宮の近くには役所としての「公所（ぐぞ）」が置かれていたために、後代になり、その地は「久所（ぐぞ）」と呼ばれるようになっていった。

鎌倉幕府の有力な御家人であった中村氏の子孫が戦国時代まで活躍していたことは歴史上よく知られている。「久所（ぐぞ）」を本貫（ほんがん・本籍地）とする多くの武者たちが有力な武家に仕えていたであろうことは容易に推測できることである。戦国時代の小田原北條氏にもそのような武者たちが仕えていたであろうことも、また大いにあり得ることである。

小田原北條氏が豊臣秀吉の小田原攻めで滅亡したのは 1590 年である。小田原城は徳川家康に与えられた。前城主の北條氏に仕えていた多くの武者たちは知行・俸禄を失った。生きるために田畑を耕して生活を始める武者たちも数多くいたであろう。この地に最初に入植したと伝えられる「七人の武者」もそのような武士たちであったかもしれない。互いに見知らずではなく、血縁や地縁で結ばれた仲間であったと考える方が可能性は高い。

たぶんそれは、この地を取り巻く自然環境や歴史的史料からみて中村郷の「久所（ぐぞ）」を祖先の地とする武者たちであり、新しい地にその名をつけたであろうことも、また大いにあり得ることである。それは今からおよそ 400 年前、江戸時代が始まろうとする直前の時期であったかもしれない。



『資料：調査のまとめ』

1. 聞き取りのまとめ

1) 高橋 清さん（久所自治会の最長老のお一人・久所自治会 4組）

「久所」の昔の話

伝え聞いた話では、昔、この地に7人の武者がこの地に住み着いた。そのきっかけは小田原北條氏が豊臣秀吉に敗れ、北條氏に仕えていた多くの武者たちが職を失ったことにあるのではないかと推測される。昔からこの地には椎野・高橋・和田・押田・飯田和との姓が伝わっているため、これらが武者の苗字ではなかったか。和田家は途絶えてしまい、今は残っていない。また久所にはセイザエモン屋敷、トミエモン屋敷、ワダ屋敷と呼ばれていた屋敷跡があったことを覚えている。祖母は文久3年（1862）生まれ、その祖母の祖父は七左右衛門といい、過去帳によると享保18年（1733年）に死去。それ以前の過去帳はお寺が火事で焼けてしまい、残っていない。

（注：従って高橋家の最初のご先祖はそれ以前にこの地に入ったのであり、その時期は戦国時代の末期から江戸時代初期であろう）

江戸時代の小田原藩の頃から府川村はあった。府川村は最初から府川と久所の二つの区域に分かれていた。明治になり、この地は足柄県府川村久所と言った（のちの50区の1が「府川」で、50区の2が「久所」）。そののち、府川村は他の村と共に合併して富水村になった。さらに富水村・久野村・芦子村・二川村が合併して足柄村に、すぐに足柄町になった。昭和15年、皇紀2600年の記念で、足柄町と小田原町が合併して小田原市になった。

（注：富水村は、1889年（明治22年）4月1日の町村制の施行により、蓮正寺村・中曾根村・飯田岡村・堀之内村・柳新田村・小台村・新屋村・清水新田・北窪村・府川村・穴部村・穴部新田および多古村と足柄上郡岩原村の飛地が合併して発足。1908年（明治41年）4月1日に富水村・芦子村・二川村・久野村が合併して足柄村が発足。同日富水村は廃止となった¹。）

所蔵されている「神奈川縣足柄下郡 旧富水村地図」（昭和7年発行）を拝見すると、旧富水村の大字「府川」の地図は二つあった。現在の大字「府川」の図と大字「府川」と表示された現在の「久所」の図である。今はほとんど忘れ去られているが、「久所」の小字名は次の通りであった。すなわち、水窪（みずくぼ/433-491）・堀籠（ほりかご/492-517）・眞角（まかど/518-570）・外貝戸（そとかいど

¹ 富水村：「小田原市史」通史編 および <http://ja.wikipedia.org/wiki/富水村> など。

/571-600)・美之輪 (みのわ/601-636)・仲澤 (なかざわ/637-697)・西之窪 (にしのかぼ/692-736)・渡り澤 (わたりさわ/737-748)・鹿塚 (ししづか/749-769)・堀ヶ窪 (ほりがくぼ/770-800)・羽ヶ尾 (はねがお/801-824) である。なお括弧内の数値は当時の地番で、現在の久所の住所“小田原市府川 xxx”の xxx と見て良いであろう。

(注：「旧富水村地図」に「久所」の地名は出てこなかったが、大字「北ノ窪」の図には小字として「久所前」があることから、富水村になる以前から「久所」は地名として存在していたことはたしかである。現在の国土地理院発行の二万五千分の一の地図に「久所」の地名が明記されていることはそれを物語っている。また相模沼田駅から出て旧道を通り、久所に向かう道の分岐は現在でも「久所入口」と通称されている。中井町にも同じように井之口方面から山を越えて中村の「久所」への分かれ道の分岐は「久所入口」と呼ばれている。)

「諏訪神社」と今はない「天満宮」の話

現在の公民館の場所は昔は山だった。おばあさんから聞いた話では、明治の末までそこには“天神様”(天満宮)があった。久所の人たちは昔からその「天満宮」と「諏訪神社」の二つを鎮守としていた。「天満宮」は明治の一町村一神社政策により現在の「諏訪神社」に合祀され、土地もまとめられた。以前調べてことがあるのだが、「天満宮」のあった土地は明治の終わり頃(明治41年~42年頃と思う)に「諏訪神社」の土地として登記されていた。「諏訪神社」の下社などもその時に合祀されてなくなったのだろう。現在の「府川一番地」には神社がなくても「諏訪神社」の土地であるのはそのような経緯があったためだ。

(注：神社合祀政策は明治初年の太政官布告と明治39年の年の内務省訓令がある。特に後者の内務省訓令により日本の神社の数は激減した。南方熊楠がこれに反対運動を起こしたことはよく知られている。久所の天満宮は内務省訓令が出てすぐに取り壊されたのであろう。なお前述の「旧富水村地図」には天満宮とその敷地がはっきりと描かれている。富水村は明治22年から明治41年まで存在した。)

つい数年前に老朽化で取り壊された「諏訪神社」の神楽殿の建物は「天満宮」のお社の一部だった。「天満宮」と書かれた額は「諏訪神社」の中の奥宮にまだ置かれているはずだ。額には寄贈した「(椎野)幸次郎」の名前があったと思う。また「天満宮」が取り壊されるときに、社の中にあつた小さな奥宮は子安の社として「北ノ窪」の「陽雲寺」に引き取られた。しかし大正12年の関東大震災で「北ノ窪天神社」が倒壊したあと、再建したときに陽雲寺にあつたその小さい社は「北ノ窪天神社」に移された。今でも「北ノ窪天神社」の奥宮として中にあるのではないか。

(注：平成26年3月30日の諏訪神社大祭の前日に確認したところ、お話にあつた「天満宮」と書

かれた額は「諏訪神社」の中の奥宮の裏側の壁に立てかけて置かれてあり、額の裏側には「慶応二寅年正月 願主當邑 椎野幸治良・・・」と書かれてあった。）

「天満宮」の跡地には関東大震災の後に養蚕のための久所の共同作業所が作られた。私の家の一階の天井が高いのは二階で蚕を飼っていたためだ。その共同作業所の隣には事務所の建物があって、「久所」の人たちが集まる場所、青年会所として使われた。4畳半と8畳間くらいの広さだった。太平洋戦争後になって、明治製菓の工場が栢山に造られることになり、その造成に土が必要になって山を削り低くして今の久所公民館の土地が造られた。公民館の脇の切り通しの道もその時に造られた。

「諏訪神社」の天井絵は今はずくなってとても見にくいですが、昔は鮮やかな絵だった。江戸時代に狩野派の小田原の絵師が描いたと聞いている。あるとき天井絵に描かれている龍が降りてきたという龍の形をした跡が床の上に見つかった。その時に撮った写真を見たことがあるが、たぶん中に吹き込まれた落ち葉かナメクジが動いた跡ではないかと思う。

(注：諏訪神社は、後述の椎野寿雄さんの話によれば、少なくとも明治の初めと関東大震災で崩壊したあとに建て直されている。天井絵は建て直されるたびに江戸時代からの絵をそのまま用いられてきたのであろう。)

「府川」の名主であった稲子家の先祖は信州から移ってきた武田信玄の一党であって、諏訪神社の創建はそのご先祖が関係していると聞いている。「府川」の中にあって稲子家だけは久野にある総世寺の檀家だ。稲子家はもともと久野に住んでいて、久野から「府川」に移ってきたのではないかと。稲子家は諏訪神社にまつられているご神体を保管していて、お祭りの時に神社に持っていくようにしており、神主のような立場だった。

(注：甲斐の武田信玄は小田原北條氏のいた小田原城を1569年に攻めているから、諏訪神社の創建はその頃なのであろうか。また総世寺は小田原北條氏よりも前の小田原の支配者であった大森氏の大森氏頼が1441年に創建した。大森氏頼は小田原に城下町を整備して相模西部の支配を確立し、後に嫡男の実頼に小田原城を譲って自身は岩原城を守り、明応3年（1494年）死去している²。)

今はない「西光寺」の話

また「天神様」（天満宮）の隣（現在の久所自治会6組付近）には「西光寺（さいこうじ）」という寺があった。この寺は小田原の谷津に移り「慈眼寺（じげんじ）」になった。この寺は“投げ込み寺”と言われていた。

² 大森氏頼 : <http://ja.wikipedia.org/wiki/大森氏頼>

(注：話に出た慈眼寺は小田原市城山 2-27-6 に現存する黄檗宗の寺である。寺の縁起によると『元禄 16 年（1703）の大地震での被災者を追福するため、大久保加賀守忠増が一寺建立を企図、久野総世寺 18 世實全と謀って、廃寺となっていた曹洞宗の府川村の天神下にあった西光寺を引寺し、僧恵極を中興開山に迎えて黄檗宗慈眼寺と号し、承德 5 年（1715）に堂宇を建立した』³とある。この記述は江戸時代の調査報告書「新編相模国風土記稿」⁴（1841）の「谷津村」の項の「慈眼寺」の説明を引用しているのであるが、一方同じ「新編相模国風土記稿」の「府川村」の項によれば、「西光寺跡」は府川村の字天神下にあつて、その「西光寺」は府川村にある「正応寺」の開祖が慶長 15 年（1610）に隠棲の場として建て、元和年間（1615-1624）に亡くなった後は無人となっていたところ、総世寺の第 18 世實全が万治 3 年（1660）に小田原谷津村に号を移して寺を建て、それが「慈眼寺」となると記されている。二つの記述の年代が異なっている理由はわからないが、元禄の大地震は実際にあった話なので、前者の年代の記述が正しいのであろう。なお「西光寺」の面積は四畝四歩（およそ 125 坪）と記されているので、お寺という現在のイメージよりは隠居所のような小さな建物であったのかもしれない。)

2) 椎野寿雄さん（久所自治会の長老のお一人・久所自治会 5 組）

「久所」で昔のことに最も詳しいのは高橋清さんであり、高橋さんにお聞きするのが一番良い。覚えていることは、今の公民館の地は、隣の椎野一巳さん宅と昔は同じ高さの山であつて、その間は切り通しの道になっていた。それが公民館の西の現在ある細い坂道だ。お社はもうなかった。公民館の東側の現在の切り通しは戦後になってその山を切り崩して造った道。山の隣には塚のようなものがあったことを覚えている。

(注：塚とは人工的に作った小高いところや墓などを意味する。高橋清さんの話に出てくる西光寺というお寺があつた場所に相当する)

現在の諏訪神社の社は昭和の初め頃に建てられた。ひいおばあさんから聞いた話では、その前の社はひいおばあさんの実家（大工さん）が建てたと聞いている。ひいおばあさんは昭和 15 年に 92 歳で亡くなっている。父（明治 36 年生まれ）はこのことを知らなかった。

(注：ひいおばあさんの生まれは天保 9 年（1838）頃になる。お話によれば、諏訪神社は明治の初め頃と昭和の初めの二度にわたって建て直されていることになる。諏訪神社の鳥居脇にある由来記によれば、造営の記録は天明 2 年（1782）および大正 15 年（1926）となっている。)

³ 慈眼寺：http://www.tesshow.jp/kanagawa/odawara/temple_shiroyama_jigen.html

また <http://hikaenochou.world.coocan.jp/33aoki.html> に詳しい

⁴ 「大日本地誌大系」：『新編相模国風土記稿』（雄山閣版）

3) 石黒弘さん（郷土史家・足柄上郡中井町在住）

中井町の地域には、源頼朝の旗揚げの時に、重要な働きをした豪族の中村一族がいた。中村一族の館跡近くには源頼朝と関連が深い「五所八幡宮」がある。この近くに古の役所である「公所（ぐぞ）」が置かれていたのではないかと。

この地域は「公所（ぐぞ）」と呼ばれていたと思われるが、後に同じ呼び名の「久所（ぐぞ）」に変わったようだ。なぜ変わったのか、いつ変わったのかはわからない。昭和33年に書かれた村史にも何も書かれていない。江戸時代の1658年の古文書にはすでに「久所村」との記述がある。

中井町の「久所」と小田原市の「久所」との関連についてはわからない。小田原の「久所」の地域は平安時代末期に沼田城のある沼田氏の領地であって、「公所」が置かれていたのではないかとの説を“ツイキ”さん⁵から聞いたことがある。その「公所」が「久所」に変わったのではないかと。

4) 大脇良夫さん（郷土史家・足柄上郡開成町在住）

『地名転移説』に基づけば、小田原の「久所」の場合は、「久所」を故郷とする人たちがずっと昔にこの地に入って開拓して移り住んだのではないかと。

（注：実際に、北海道に入植した奈良県十津川村の人たちがその地を「十津川」と命名し、同じく広島の人たちが開拓地を「広島」と名付けている。イギリスのロンドンと同じ名前をつけた地名はカナダを始め世界各地にあり、『地名転移説』の例は日本ばかりでなく世界の各地で普遍的に見られる。）

2. 地名調査

1) 「久所」について

地図⁶及び文献資料などの調査では「久所」と確認された地名は全国で下記の6カ所にあった。

1. 神奈川県小田原市：久所（ぐぞ）
2. 神奈川県中井町：久所（ぐぞ）
3. 神奈川県相模原市：久所（ぐぞ）
4. 神奈川県秦野市：久所（ぐぞ）
5. 大分県大分市：久所（くじょ）

⁵ 郷土史家の立木望隆さんのこと。「郷土の地名」（昭和45.9.25）などの著書がある。

⁶ 国土地理院から発行されている二万五千分の一の地図

6. 千葉県館山市：久所（ぐじょう）

「久所」との地名はかつては全国各地にあったが、現在では地元の人には慣用として使われている古くからの地名として残っていても、正式な表向きの地名としては消えているところが多いと思われる。現在まで「久所」が残っているのは全国でも神奈川県の中部から西部にかけて、つまり昔の相模国が多いとの事実は何を意味しているのだろうか。

【小田原市の久所（ぐぞ）】

「郷土の地名」⁷によれば、私たちが住んでいる小田原市の「久所」は「木所（きどころ）」が訛ったとの説と、公文所が置かれていた場所である「公所」に由来するとの説がある。後者の場合はその地に平安時代の荘園が存在しなければ違うであろうとも記述されている。後述する地域の歴史から見て私たちの「久所」の地は役所が置かれるほどの荘園が存在してはいないので、「久所」の由来が「公所」にあるとする説は疑問である。

「久所」の地名が出てくるのは江戸時代後期に編纂された「新編相模国風土記稿」（1841）である。これによれば、足柄上郡早川庄の「府川村」の項に、小名（こな・小字）として「久所」・「萬石」・「楠木」・「西ノ久保」が記されている。また隣接する「北ノ久保村」の項には小名として「山崎」・「久所前」が記されている。これ以前の史料はまだ見つかっていない。

【神奈川県中井町の久所（ぐぞ）】

中井町は平安末期から鎌倉期にかけて豪族「中村氏」の「中村郷」のあった地、日本における武士の発祥の地の一つである。中村氏（中村宗平やその子の中村実平など）は源頼朝を助け、鎌倉幕府開府に大いに貢献し、有力な御家人となった。中井町には保元2年（1157年）創建の「五所八幡宮」がある。源頼朝の信仰が厚く、鎌倉幕府の庇護が深かった。現地に行ってみると、五所八幡宮のすぐそばに久所自治会の公民館が建っていて、近くに中村氏館跡もあり、この「久所」地域が当時は中村郷の重要な場所であり、荘園管理のための「公所」があったであろうことが推測される。「中井町史」⁸によれば、中井町の「久所（ぐぞ）」については、「昔役所があった所=公所」と「木所（きどころ）」が訛ったとの説があること、江戸時代には「久所村」と呼ばれていたと記されている。

【神奈川県秦野市の「久所（ぐぞ）」】

文献にはないが、国土地理院の二万五千分の一地図には秦野市立上小学校の北東側に「久所（ぐぞ）」と書かれた地域がある。現地に行ってみると小学校の北側の山裾の道沿いには「ここは久所自治会の避難所です」や「星屋・久所組のごみ収集場所」と書かれた標識があった。つまりこの付近の集落は

⁷ 立木望隆：「郷土の地名」、郷土文化研究会（昭和45.9.25第2刷）

⁸ 「中井町史」（平成2.10.1発行）

たしかに「久所」と呼ばれていることが確認できた。しかし秦野市の「自治会名一覧」⁹には「久所自治会」との名前はなかった。他の自治会と統合されたのであろうか。地名の由来は不明である。

秦野市は平安末期にこの地を支配していた波多野氏の「波多野郷」があった。波多野氏の一族の大友氏は現在の小田原市の「東大友」と「西大友」の地名があるように、「大友郷」を拠点にして足柄平野の北側一帯（開成町・松田町・山北町・南足柄市）を領有していた。

【神奈川県相模原市の久所（ぐぞ）】

「難読地名辞典」¹⁰には、中井町の「久所」とともに相模原市の水郷田名の旧名である「久所」が出ている。「日本歴史地名大系」の14巻「神奈川県の地名」¹¹では、「久所河原」・「久所渡」が記載されている。

現地に行くと、相模川の高田橋の東端に「久所の渡し」と書かれた石碑があった。近くの集落は大山参りの宿場「久所」であることがわかっている。その由来はこの地に「公文所（くもんじょ）」が置かれていたのであるが、のちにこの地は「文」が省かれて「公所」とよばれるようになり、その後相模川の洪水のたびに人々が久しくこの宿場に滞在することが多かったので、同音の「久所（ぐぞ）」と変わっていったとされている¹²。

【千葉県館山市の久所（ぐじょう）】

館山市の「久所」は、館山市から白浜に抜ける道沿いの山あいの盆地、「神余（かなまり）」地区にある。その地には岩壁を彫ったほころの中に「久所地蔵」があり、集落の中央をながれる巴川には「久所橋」が架かっていて、近くには「久所区集会所」があった。畑にいた古老に聞くと、その集落は「久所（ぐじょう）」と呼ばれていることがわかった。しかし地名の由来はわからない。

神余（かなまり）とは“神が余る”の意である。律令時代は郷に住む家の数が50戸をこえると増えた分を別の郷とする決まりがあり、それを余戸（あまりべ）呼んだ。この地は、安房神社の神に仕える人が住んでいた神戸（かんべ）郷の戸数が多くなり、新しく開拓し余戸（あまりべ）として移住したので神余（かなまり）呼ばれるようになったとのことである。ちなみに小田原市の「穴部」の地名も同じように余戸（あまりべ）に由来するとされている。

この地には神余城跡や神余氏館跡がある。神余（かなまり）氏は平安末期から鎌倉期にいた豪族であって、源頼朝が石橋山合戦（1180）で敗れ土肥実平とともに真鶴の岩海岸から舟に乗って房総半島の安房国に逃れた際に頼朝を出迎え、助けて鎌倉幕府開府に貢献したという。早川郷（小田原）の土

⁹ 秦野市自治会名一覧：<http://49.212.27.127/mobile/bosai/jichikai/index.html>

¹⁰ 「難読地名辞典」、山口恵一郎・楠原祐介編、（三陽社 昭和 55.10.5 第3版）

¹¹ 「日本歴史地名大系」・14巻「神奈川県の地名」・下中邦彦編・平凡社（1984.12.15 初版）

¹² 相模原市の久所：<http://www.sagamihara-kng.ed.jp/kouminkan/tana-k/timei.htm>

肥氏とはるか遠い房総半島南部の領主であった神余（かなまり）氏とがこのような近い関係にあったとは興味深いことである。

この地には明治7年創立という歴史ある神余小学校が神余氏館跡にある。小さいけれどもモダンな建物のハイテク小学校¹³である。平成25年の6年生の修学旅行は小田原に来て箱根に一泊し、鎌倉に寄って戻るコースであった。これもまた歴史の因縁を感じる。

【大分県大分市の久所（くじょ）】

「日本地名大辞典」¹⁴の第44巻の大分県の部に、大分市には「久所村（くじょむら）」との村名が丹川（あかがわ）村となるまでの明治9年まであったと記されている。市町村合併をくり返してきた大分市の詳細な資料¹⁵を見ると、明治9年に合併して丹川（あかがわ）村と名前を変えるまではたしかに「久所村」が存在していた。現在の地図で確認すると「上久所」と「下久所」は隣接した場所にあるので、もともとは大分市のこの地に「久所村」のあったことが推測できる。なぜ「久所」なのかについての由来はわからない。現地での調査が必要であろう。

2) 「公所」について

「久所」は「公所」に由来するとの説があるので、国土地理院の二万五千分の一地図・文献・ネット検索で「公所」と表示されている全国の地名を調べた。下記の3カ所であった。

1. 神奈川県平塚市：「公所」（ぐぞ）
2. 神奈川県厚木市：「公所」（くじょ）
3. 神奈川県大和市：「公所」（ぐぞ）

いずれも「相模国」にある。なぜであろうか。

平塚市の「公所」には「公所神社」があり、「公所自治会館」がある。大和市には「公所 浅間神社」、「公所自治会」がある。地名の由来はこの地に「公文所」が設けられていて、「公文所」の「文」が取られて「公所（くじょ）」となり、さらに「公所（ぐぞ）」となったとしている¹⁶。「公所（ぐぞ）」との言葉の由来は平安時代および鎌倉時代の「公文所」にさかのぼることができる。

現在でも「公所（こうしょ）」との言葉は、役所や公共施設、会館などを表す“役所言葉”（例えば名古屋市や岩手県など）として使われている。地名としての「公所」が少ないのは現在でもなお公（おやおやけ）の建物などの一般名称として生きて使われているためであろうか。

¹³ 神余小学校ホームページ <http://www.city.tateyama.chiba.jp/school/kanamari/>

¹⁴ 「日本地名大辞典」・別巻Ⅱ「日本地名総覧」・竹内理三編・角川書店（1990.2.8）

¹⁵ 大分市の旧久所村：<http://www.google.com/webhp?hl=ja#hl=ja&q=大分市%E3%80%80久所村>

¹⁶ 平塚市の公所：<http://homepage3.nifty.com/c-guzo/>

<地名のまとめ>

「ぐぞ」と呼ばれることのある地名、つまり「久所」と「公所」の全国を対象とした地名調査では、「久所」は6カ所、「公所」は3カ所の計9カ所が現存していた。地名の由来はそれぞれにあるようだが、私たちの住む「久所」とは異なるように思われる。またそのうち7カ所がいずれも神奈川県旧「相模国」にあるのは不思議である。何か理由があるのだろうか。

「久所」や「公所」の地名の由来として、平安時代および鎌倉時代の荘園や郷の管理施設としての「公所」あるいは「公文所」が置かれて場所に由来するとすれば、その場所は数百以上、あるいは千を超える数はあったはずである。そうであるとすれば現存の「久所」の数は少なすぎるし、また現存している「久所」が相模国に偏在しているのも不思議である。これは何を意味しているのであろうか。

3. 江戸期初めまでの「久所」周辺の歴史

私たちの住む「久所」は箱根明神岳の山裾から足柄平野に伸びている諏訪の原台地の北麓に位置する。現在小田原市フラワーガーデンおよび県立諏訪の原公園がある諏訪の原台地は小田原地方では最も古くから縄文人が住み始めた場所であって、その始まりはおおよそ1万5千年前とされる。弥生時代に入ると水田耕作のために狩川流域の平野部に近いところに居住するようになった。

現在「久所」は南足柄市の「沼田」、小田原市の「北ノ窪」と「府川」の3つの地域（自治会）に囲まれている。「小田原市史」¹⁷によれば、「府川」には縄文文化末期から弥生文化中期の「諏訪の前遺跡」があり、また「北ノ窪」には弥生文化後期の「北窪小原遺跡」がある。「南足柄市史」¹⁸によれば、「沼田」には縄文文化中期から後期にかけての「沼田上ノ原遺跡」や「沼田城山下横穴墓群」がある。「久所」の周辺の地域では縄文時代からすでに人が居住し始めていたことがわかる。

「南足柄市史」¹⁹によれば、「和名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）」（931年-938年）の中に出てくる「高家郷（たかやごう）」は現在の南足柄市の南部・沼田・岩原・塚原の1帯ではないかとされている。現在の「久所」の地は地理的・地形的には沼田と1帯であり、従ってこの「高家郷（たかやごう）」に含まれていたのではないかとと思われる。

1192年の古文書には沼田太郎との名前が現れる。このことは「沼田」の1帯がすでに沼田氏の所領

¹⁷ 「小田原市史・資料編 原始・古代・中世Ⅰ」（平成7.3.15）

¹⁸ 「南足柄市史」・「資料編 自然・原始・古代・中世」

¹⁹ 「南足柄市史」・「通史編 自然・原始・古代・中世・近代」（平成11.3.31発行）

であったことを表している。沼田氏は平安時代末期より現在の秦野市を居住地とした波多野氏の一族である大友氏の親族であって、「沼田」に館（沼田城）を作り、居住していた。

鎌倉期初めには足柄平野の北半分は大友氏が「大友郷」として領有し、海側の南半分は中村氏の一族である土肥氏が「早川郷」として領有していた。「久所」の地はちょうどこの二つの郷の境界に位置している。その境界は分沢川にあったのだろうか。現在の「久所」が小田原市側にあつて南足柄市との境界線に接しているとの状況から類推すると、当時においても「久所」の地は「大友郷」ではなく「早川郷」に含まれていたのだろうか。

大友氏および土肥氏（のちに小早川氏）はともに鎌倉幕府の有力な御家人として西国に配され、その子孫には戦国時代の大名としてそれぞれ北九州地方を治めた大友宗麟や中国地方を治めた小早川秀秋がいる。戦国大名としての大友家および小早川家がともに現在の小田原の地を「本貫（ほんがん）」（本籍・出身地）としていたことは興味深い事実である²⁰。

塚原にある「天王院」は応永21年（1414）の創建で、沼田左衛門尉が開基したとされている。これから沼田氏はこの時点までは有力者であったことがわかる。しかし「中井町史」によれば、その7年後の応永28年（1421）に大森頼春が狩野庄の沼田郷を二岡神社（御殿場市鮎沢）に寄進している。これらのことから、この時期には「沼田」は領主が交代し、駿河国裾野を基盤とした大森氏の領有となっていたことがわかる。大森氏は小田原城を築き、足柄平野一帯を支配するようになる。沼田氏によって築城されていた沼田城もまた大森氏によって改修されている。

その後、大森氏は北条早雲に小田原城を奪われ（1495）、小田原北條氏が足柄平野を支配することになる。「小田原市史」の記載によれば、永禄2年（1559）の「北條家所領役帳」に北條家の御馬廻衆であった狩野泰光の知行地として「飯田岡」および「府川」の地名が見られる。「府川」の名が文献に現れるのはこの「役帳」が初見であるとされる。

（注：御馬廻衆とは大将の馬のまわりに付き添って護衛し、伝令や決戦兵力としての騎馬武者）

「久所」は、近くの「沼田」の八乙女神社を鎮守としているのではなく、「府川」と同じ諏訪神社を鎮守としている。そうであれば、なぜ「府川」の中に包含されるのではなく独立した「久所」との地名が今日まで残されたのであろうか。「久所」の出自には何か特別の事情があったのだろうか。また鎮守を共有しているのは何か特別の事情があったのだろうか。

²⁰ 「相模武士 全系譜とその史跡」・湯山 学著・「第三巻 中村党・波多野党」、戎光祥出版（2011.5.6）、および他書籍を参考

小田原北條氏は豊臣秀吉によって 1590 年に滅亡し、徳川幕府の直轄地の小田原藩となった。「小田原市史」によれば、城主がいなくなったことにより家臣たちは“就職先”を求めて全国に分散したようである。中には秀吉が北條氏の家臣の仕官先を直接に世話をした例もあった。しかし身分の低い武士たちはそのまま放逐されたり、生きていくために農民や商人などになった者もいたであろう。

徳川時代初期の「慶長検地」（慶長期：1596-1615）の記録では当時の村落は荒廃した耕地が多く、「久所」に近い狩野村（南足柄市）の例では荒廃地は 15.3%にも及んだと記されている。戦国期から江戸幕府への移行した混乱期であったためであろう。「府川」も例外ではなかったであろうし、「久所」の地も荒廃地あるいはなお未開の地であったかもしれない。

江戸期の万治2年（1659）の「万治惣検地」の記録によると、検地は北から3月26日に「北ノ窪」、27日に「沼田」、28日に「府川」、29日に「穴部」・・・と順番に行われたとある。その時にすでに「久所」に田畑が存在していたとするならば、諏訪神社をともに鎮守としている「府川」と同じ3月28日に検地が行われたことになる。

江戸時代の小田原藩主は、最初は大久保氏、次に幕府直轄となり、そのあと稲葉氏が藩主となり、また再び大久保氏に代わって幕末まで続く。藩主が代わるたびに「家臣たちは小田原城明け渡しの際に召し放たれて離散した」²¹とある。多くの武者たちが俸禄・知行を失い、自ら田畑を耕すようになった可能性は江戸時代になる前の混乱期ばかりでなく、江戸時代にも起こっていたようである。

<まとめ>

私たちの住む「久所」との地名は、江戸時代後期の「新編相模国風土記稿」を除き、通常入手しうる江戸時代初期までの一般的な文献資料には出てこなかった。そのような資料には“小字（こあざ）”のようなマイクロな地名は出てこないのが通例なのであろう。さらに調査するには、長く代々続いている家系の個人の日記や証文の類、あるいは神社や寺院の中に秘蔵されている過去帳などの古文書の類を丹念に調べる必要ありそうである。

²¹ 「おだわらの歴史」：小田原市立図書館編（平成 19. 3. 15）

【補 足】

1. 諏訪神社について

諏訪神社は、県立諏訪の原公園にある現在の上社の「本宮」の他に、山を下った「細窪」の地に「前宮」があり、また下社の「春宮」（相洋高校グラウンド）および「秋宮」（清水新田）の4つがあったという²²。この形式は長野県にある諏訪大社と同じであって、当地の諏訪神社はそのミニチュアとして創建されたと言えよう。

諏訪大社は「源頼朝が挙兵時より守護を受けたことで武家が武神として信仰、全国に勧請（かんじょう）された」とある²³。勧請（かんじょう）とは「神仏の分身、分霊を他の土地に移してまつこと」の意であり、その結果、全国各地には一万とも言われる数の末社が存在するようになった。小田原市の諏訪神社は「久所」と「府川」の鎮守であるこの「諏訪神社」だけである²⁴。近くには大磯町および箱根町の宮城野と仙石原にあるが、その他にはない²⁵。

古来から軍（いくさ）神として崇められていた諏訪神社がいつ誰によってこの地に創建されたのであろうか。時期としては鎌倉期以降と考えられる。「諏訪神社」の鳥居脇にある由来記によれば、武田信玄に仕えていた荒川光輝という武者が武田家滅亡後にこの地に住みつき、諏訪明神を祀ったと記されている。「久所」にやってきたという武者たちやその子孫たちもやはり創建に関係しているのであろうか。

2. 「府川」・「北ノ窪」・「沼田」の地名について

「久所」を取り囲んでいる「府川」・「北ノ窪」・「沼田」の三つの地域の名前はいずれもその地形に由来する。「府川」との地名は全国各地にあって、湿地や泥深い低地を意味する古語「フケ」から来ているとの説が一般的である。小田原の「府川」もまたそのような地形に由来する。「北ノ窪」もまた湿地帯であったが、むしろ「府川」の北にある窪地であることを強調してつけられた²⁶。「沼田」は東側を狩川、南側を分沢川とする沼地・湿田であったことに由来する。これらの地区には、縄文期・弥生期からの遺跡があり、古代から人が居住し、地名も長い時代を経て定着していったのであろう。しかし「久所」にはそのような遺跡はない。いつごろから「久所」と呼ばれるようになったのであろうか。

3. 「久所」の風景について

「久所」との地名が付いている全国6カ所のうち、大分市をのぞき、他の5カ所を訪れて付近を散

²² 「西さがみの地名」・田代道弥・「小田原ライブラリー20」・夢工房（2010.2.15 初版）

²³ 「日本歴史大事典」（小学館）

²⁴ 「小田原市内寺院・神社一覧」・小田原市図書館地域史料室蔵

²⁵ 神奈川県神社庁；<http://www.kanagawa-jinja.or.jp/>

²⁶ 「地名ルーツ 61」（神奈川新聞 昭和 59.1.25）、小田原市図書館地域史料室蔵

策した。かつて「久所」の宿場と呼ばれていた相模原市の水郷田名（相模原市）の集落は広く相模川のほとりの低い河岸段丘の上にあるが、その他の4カ所の「久所」（小田原市・秦野市・中井町・館山市）の地はいずれも低い山々に囲まれた谷間に集落と田畑があり、里山の風景が残っていて、よく似た風景である。それらの「久所」は山を背景にして奥まった地にあり、人が多く住む繁華な場所から離れている。まだ訪問していない大分市の「上久所（かみくじょ）」の現地の衛星写真やストリートビュー²⁷を見る限り、似たような風景のようである。

以上のような観察から、「久所」の地名の由来も、「(歩いて) 久しく(長く) 時間がかかるところ」、だから「久しい所」、だから「久所」になったとする説もあり得るかもしれない。

4. 久所の「天満宮」について

「久所」には「天満宮」があった。また隣の「北ノ窪」には「北ノ窪天神社」があり、鎮守として残っている。明治の神社合祀政策の嵐から逃れられた例なのであろう。神社合祀が行われる以前はそれぞれの集落には複数の神社があり、それぞれの神々を鎮守としていたのであって、「一集落に一神社」の状態になったのは近年になってからであることに留意したい。「久所」の人々は、古老の話のように、神社合祀以前の昔から「天満宮」と「諏訪神社」をともに鎮守としてきたことは確かであろう。

「天満宮」は「天神」（てんじん）、「天神さま」「天神さん」とも呼ばれ、政治的不遇を被った菅原道真の怒りを静めるために神格化し祀られるようになった御霊信仰の代表的事例である²⁸。「天満宮」は道真の文才から学問の神とされるが、また一方で火雷天神の名から雷神信仰と結びつけて農業に関連ある神として崇敬されてきた²⁹。

明治から昭和にかけての神道国家管理時代は「宮」号は祭神が基本的には皇族であり、かつ勅許が必要であったため、「天満宮」と称していた神社も「天神社」・「天満神社」などと改称させられたようである。「北ノ窪天神社」もその一つなのであろう。「久所」の「天満宮」は改称させられる前に神社合祀政策で取り壊されていたのかもしれない。

次ページに、前述の「神奈川県足柄下郡 旧富水村地図」（昭和7年発行）の地図に示された「久所」の「天満宮」とその位置および諏訪神社の中に移管されていた久所の「天満宮」に掲げられていたという額を示す。

²⁷ <https://maps.google.co.jp/>

²⁸ <http://ja.wikipedia.org/wiki/天満宮>

²⁹ 「世界大百科事典」、平凡社（1988. 4. 28 初版）

下図の左側は、「神奈川縣足柄下郡 旧富水村地図」（昭和7年発行・高橋清さん所有）に示された「久所」の「天満宮」（天神社・天神様）の位置である（旧富水村は1889年（明治22年）4月1日から1908年（明治41年）3月31日まで存在した）。この地図は神社合祀政策（明治39年）により「天満宮」が取り壊される以前に作られたことがわかる。神社は、現在の久所公民館の場所、この図の中央左側の大字眞角地区の557番地にあつて四角く囲まれて描かれている。当時は小高い山の上にあり、石段が描かれているように見える。図中の番地には現在でもそれぞれの方々がお住まいになっている。「新編相模国風土記稿」（1841）に記録がある“天神下”にあつたという「西光寺」はこの地図の546、547番地付近にあつたのかもしれない。

下図の右側は、久所の「天満宮」の額である。「天満宮」が取り壊され諏訪神社に合祀されるときに諏訪神社の中に移管されたと伝えられたものであり、奥宮の後側の壁に立てかけられてあつた。額の裏側には「慶応二寅年正月 願主当邑 椎野幸治良・・・」と記されてある。慶応2年は明治維新直前の1866年であり、府川村ではなく「当邑」と書かれているのはより特定した地域である「久所」を示しているのであろう。「・・・」は補強のために裏面に打ち付けられた木材により判読できなかった部分である。平成26年3月30日の諏訪神社大祭の前日に確認した。



諏訪神社の中に残されていた久所の「天満宮」の額。裏面には寄進した「椎野幸治良・・・」の銘が彫られている。